床屋

宮沢賢治

本郷区菊坂町

※

九時過ぎたので、床屋の弟子の微かな疲れと睡気とがふっと青白く鏡にかゝり、室は何だかがらんとしてゐる。

「俺は小さい時分何でも馬のバリカンで刈られたことがあるな。」

「えゝ、ございませう。あのバリカンは今でも中国の方ではみな使って居ります。」

「床屋で？」

「さうです。」

「それははじめて聞いたな。」

「大阪でも前は矢張りあれを使ひました。今でも普通のと半々位でせう。」

「さうかな。」

「お郷国(くに)はどちらで居らっしゃいますか。」

「岩手県だ。」

「はあ、やはり前はあいつを使ひましたんですか。」

「いゝや、床屋ぢゃ使はなかったよ。俺は大抵野原で頭を刈って貰(もら)ったのだ。」

「はあ、なるほど。あれは原理は普通のと変って居りませんがね。一方の歯しか動かないので。」
「それはさうだらう。両方動いちゃだめだ。」
「えゝ、嚙(かじ)っちまひます。」

※

鏡の睡気は払はれて青く明るくなり今度は香油の瓶(びん)がそれを受け取ってぼんやりなった。
「失礼ですがあなたはどちらに出ていらっしやいますか。」

「図書館だ。」

「事務員ですか。」

「いゝや、頼まれて調べてゐるんだ。」

「朝はお早いでせう。」

「朝は六時半にうちを出るよ。」

「ずゐぶんお早いですね。」

「どうせうちに居たつておんなじだ。」

※

睡気が忽ち香油の瓶を離れて瓦斯の光に溶けて了ひ

室が変に底無しの淵のやうになつた。

「丁度五分かゝりました。あなたの頭を刈り込むのに。」

「早いな。」

「いゝえ。競争の時なら早い人は三分かゝりません。」

「指が痛くなるだらう。そんなにしたら。」

「えゝ、指より手首が苦しくて堪らなくなります。」

「さうだらう。どうせそんなぢや永くは続かない。」

床屋の弟子はバリカンを持つたまゝ手首をぶらぶらふつてゐる。

※

瓦斯の灯（ひ）が急に明るくなった。
「僕のひげは物になるだらうか。」
「なりますとも。」
「さうかなぁ。」
「も少し濃いといゝひげになるんだがなぁ、かう云（い）ふ工合（ぐあひ）に。剃（そ）らないで置きませうか。」
「いゝや、だめだよ。僕はね、きっと流行（はや）るやうな新らしい鬚（ひげ）の型を知ってるんだよ。」
「どんなんですか。」

「それはね。実は昔の西域のやり方なんだよ。斯う云ふ工合に途中で円い波を一つうねらしてね、それからはじを又円くピンとはねさすんだよ。こいつぁ流行るぜ。」

「今どこで流行つてゐますか。」

「イデア界だ。きつとこつちへもだんだん来るよ。」

「イデア界。プラトンのイデア界ですか。いや。アッハッハ。」

「アッハッハ。君。どうせ顔なんか大体でいゝよ。」

※

底本：「新修宮沢賢治全集　第十四巻」筑摩書房
１９８０（昭和55）年５月15日初版第１刷発行
１９８３（昭和58）年１月20日初版第４刷発行
入力：林　幸雄
校正：mayu
２００３年1月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。